

以上のような次第で、本書は『大唐六典』のテキストとして、今日我々が利用できる最良のテキストといわなければならぬ。六典を利用する研究者は、今後は必ず本書を参照しなければならぬ。全巻に訓点・送仮名が付されており、且つ現在我々が利用できるすべての六典に関する資料との校合がなされている本書の価値は実に大きいものがある。広池博士の業績を顕彰すると同時に、その意図を継承して、詳細な補訂を加えられた内田氏の御尽力に敬意を捧げたい。(B5判、本文五三五頁、解題九頁、目次八頁、広池学園事業部、一九七三年二月一日)

### 『宮中檔光緒朝奏摺』

神田 信夫

台北の故宮博物院では一九六九年以来、季刊の『故宮文獻』を刊行して、毎冊清代史に関する論文数篇を掲載すると共に同院所蔵の清朝の檔案の影印を収録してきた。また別にその「特刊」として、一九七〇年には『袁世凱奏摺專輯』八冊、ついで翌七一年には『年羹堯奏摺專輯』三冊をも刊行したのであったが、ここに三たび「特刊」として『宮中檔光緒朝奏摺』を『The American Council of Learned Societies』

の資金援助を受けて一九七三年六月から毎月一冊刊行することになった。貴重な根本史料を続々と精力的に整理して刊行される故宮博物院々長蔣復璁博士はじめ、その衝に当らている同院図書文獻処長昌彼得氏、台湾大学教授陳捷先氏以下の諸氏の熱意と努力に対し、先ず深甚の敬意を表したい。

故宮博物院に清朝の檔案が多数所蔵されていることは、いまさら説くまでもない。そもそも一九二五年に故宮博物院が成立した当初から檔案類の整理が行われ、やがて『掌故叢編』『文獻叢編』『史料旬刊』などの逐次刊行物に檔案がつぎつぎと鉛印されると共に『清代外交史料』『清代文字獄檔』など題目別にまとまった檔案も出版された。しかし時局の緊迫化に伴い、一九三三年故宮の貴重な多くの文物は先ず上海に遷され、いわゆる南遷が行われたが、檔案、実録、起居注、聖訓、玉牒などを取扱う文獻館の文物で南遷したのは三千七百七十三箱であったという。そのうち現在台湾に存在するのはわずか二百四箱に過ぎない。それでも『宮中檔光緒朝奏摺』の第一輯の巻頭に掲げられている蔣院長の序によると、四十万件に近い膨大な分量であるとのことである。

一九三三年十月に出版された『北平故宮博物院文獻館南遷檔案文物清冊』には、同年二月から四月にかけて前後四回に分けて南遷した文獻館の文物三千七百七十三箱について、各箱の内容が一々記されているが、そのうち宮中檔は先ず第一

回(二三〇箱)、ついで第三回(二二一箱)、第四回(一一〇箱)、計四六一箱である。一九六六年に出版された那志良氏の『故宮四十年』(二頁)によると、台湾に現存する宮中檔は三十一箱ということであるから、南遷当時に比べれば十五分の一に過ぎない。しかしそれでもこれまた大変な量なのである。前記蔣院長の序に続いて載せられている陳捷先教授の「宮中檔光緒朝奏摺出版前記」には、三十一箱の宮中檔の件数が記されており、それによると康熙朝の漢文三一五四件、滿文八一〇一件、雍正朝の漢文二二三七五件、滿文八九八件、乾隆朝の漢文五九四四六件、滿文六九件、嘉慶朝の漢文一九九三六件、道光朝の漢文二二四九二件、滿文一五五五件、咸豐朝の漢文一七〇九二件、滿文四三四四件、光緒朝(一部同治・宣統兩朝のものを含む)の漢文一八七五九件、滿文四三二一件であるから、全体で漢文一五三三五四件、滿文二七九七件、総計一五六〇五一一件である。

想えば私は一九六六年の夏、前年秋に現在の士林外雙溪に新建築が完成し台中郊外から移転して間もない故宮博物院で、今日いう『旧滿洲檔』を調査したが、その際倉庫に堆高く積まれた檔案類の木箱を瞥見し、余りの厖大さに一驚したのであった。当時係の人が毎日檔案を一束ずつ木箱から出して一々点検しているのを見て、何時になったら完了するのか、他人事ながら嘆息せざるを得なかった。その後一九七一

年の暮、第四回東亞アルタイ学会への出席の機会に再び同院を訪ねると、増築の成った図書室の一室で折しも宮中檔の整理の最中で、カードが山積みにされているのに接し、その完成の速かなるを願ったのであった。そして翌七二年九月に訪ねた時には、既に整理が完了し、十数万件の宮中檔案はすべて事項別と年代別とに分類されたカードで検出できるようになっており、早速八旗関係のものなど何点かを借出して見せて貰った。あの厖然山を成し手のつけようもなかった檔案がこのように利用可能となったことは誠に有難い次第で、関係者諸氏の並々ならぬ勞苦に感謝を捧げねばならない。

さて今回刊行された『宮中檔光緒朝奏摺』はこの宮中檔の中から光緒朝の奏摺を影印したものである。既刊の『故宮文獻』にもその第一巻第一期から第四巻第一期までの十三冊には宮中檔が影印されている。ただこの方は年代的に古いものから人物ごとにまとめていて、一番最初の上諭以外はすべて康熙・雍正朝の奏摺であるが、一九七三年三月発行の第四巻第二期からは方針が変わって、同治朝の軍機処の月摺檔を影印することになった。というのは『故宮文獻』の限られたスペースでは、宮中檔の奏摺を全部載せることは不可能なので、今回の『光緒朝奏摺』のように別個にまとめて刊行する予定であるが、同治朝については奏摺が殆ど無いためである。今回「特刊」として光緒朝の奏摺が先ず第一に選ばれたのは、

やはり利用者の多い近代史に関するものとして重視されたからであろうか。

いったい宮中檔とよばれるものは、紫禁城が接収されて故宮博物院が成立した際に、主に懋勤殿などの宮殿にあった檔案である。一九三五年故宮博物院創立十周年記念として刊行された『文獻特刊』に掲載されている「陳列文物総目」によると、当時北平の故宮では宮中檔案室という陳列室があり、宮中檔案を「臣工進呈之摺単函冊等件」「臣工繳回之硃筆」「御製詩文等項」「官修史籍」「宮中各処日行事務之檔案」の五類に分けている。またその翌年に刊行された『文獻論叢』所収の方甦生氏の「清代檔案分類問題」と題する論文では、宮中檔案を一奏摺、二請安摺、三履歷單、四貢單、五雜單、六檔冊、七另存檔案に大別し、さらにそれぞれ細分している。前掲の『文獻館南遷檔案文物清冊』によると、宮中檔案には奏摺の外に請安摺、引見履歷、上駟院檔案、銀庫檔案、雜單などがある。このように宮中檔案なるものにはいろいろな種類があるが、特に史料的に重要なのは奏摺である。そして現在台北の故宮博物院に存在する宮中檔案は殆どがこの奏摺のようである。

前記の陳教授の筆に成る「宮中檔光緒朝奏摺出版前記」には、奏摺の性質や重要性が縷々説明されている。すなわち清初には明の章奏制度を踏襲して、官印を捺した正式の上奏文

には題本を用い、官印のない私的な上奏文には奏本を用いたが、やがて康熙帝が官僚なかでも特に地方官から秘密の報告を得ようとして始めたのが奏摺制度である。皇帝は自己の手にと直接届けられた奏摺を見て意見すなわち硃批を書き、その上奏者に送り返したが、雍正帝が即位すると、硃批のある奏摺はすべて宮中に回収するようにせねばならなくなった。これが宮中檔の奏摺であって、外部の者に知られない政治万般に亘る密奏とそれに対する皇帝の硃批として史料的价值が高いわけである。もっとも雍正朝の奏摺の一部は乾隆の初め『雍正硃批論旨』の名で刊刻されているが、私が偶々宮中檔のオリジナルと対比したところでも、刊本の方は上奏文が所々削除され、硃批の文字もかなり修正されていた。ただ乾隆朝以降になると秘密性が少くなり、ついに清末には題本に代って奏摺が用いられるようになったけれども、奏摺が清朝歴代を通じて最も根本的な史料であることには変りない。

『宮中檔光緒朝奏摺』は一九七三年六月に第一輯を刊行して以来、確実に毎月一冊ずつ刊行して、本年四月をもって第十一輯に達した。毎輯右開きで漢文の奏摺、左開で滿漢合璧摺の滿文を毎頁上下二段に分けて収録し、年月日順で排列している。第一輯は光緒元年正月から四年四月までの分で、漢文八一五頁、滿文一五〇頁、第二輯は同四年四月から十二年三月までで、漢文九二〇頁、滿文三四頁、第三輯以降は毎輯

大体二二年分を取め、第十一輯で二十四年五月に至っている。毎輯の分量も満漢両文併わせて大体九百数十頁にのぼるB5版の巨冊であるが、第九輯は丁度千頁に達する。印刷は『故宮文獻』のように朱墨二色刷りではないが、皇帝の硃批、軍機大臣の奉旨墨批、皇帝皇后の喪中の藍批は該当個所に記号でそのことを明示し、満漢合璧摺のものは巻頭の漢文の目録の該当個所の上にはやはり記号を付けて注意している。そして本文中に破損のため文字の不明な個所がある場合は、第三輯以降その個所に「原檔残損」の印を捺すなどさらに工夫がこらされている。

『故宮文獻』と共にその「特刊」の『宮中檔光緒朝奏摺』の巨冊が右に述べたように定期的に着々と刊行されているのは、とかくこのような純学術的な書物の印刷の困難な昨今の状況からみて驚嘆に値すると言わねばならない。光緒朝の分は、この調子で進めば恐らくあと一年内外で完了するであろうが、さらに他の年代のものも同様に刊行して頂きたいものである。それについても折角貴重な史料が公刊されたのであるから、その十分な活用こそ今後研究者に課せられた義務であらう。

R・A・スタン 訳注

### 『瑜伽行者ドウクパ・クンレーの生涯と歌謡』

中井英基

本書は、ドウクパ・クンレー (Brug-pa kun-legs, 1455～1523) というチベットの宗教詩人の自叙伝を仏訳し、脚注を施したものである。訳者のスタン教授は、フランスにおけるシナ学・チベット学の大家であり、多くの著書を持っておられるが、これらのことは今さら贅言を要しないだろう。

このドウクパ・クンレーという人物は、カギュ派の一支派であるドク派の本山座主を代々継承したギャ氏 (Gya-pa) の一員であった。彼の経歴や活動については、教授の名著『チベットの文化』(山口瑞鳳・定方晟共訳、岩波書店、一九七一年十月)の中に、すでに部分的に紹介されている。すなわち、彼は富裕な本山座主の一員として生まれ、当初は幸福に暮らしていたが、しかし後にギャ氏一族に相統争いが起きて、父は殺され、家族は離散の憂き目にあったという。彼自